

2016 年 10 月 1 日

日本カレドニア学会

2016 年度第 2 回研究会のお知らせ

今日、ケルト文化への関心の高まりとともに、ハイランド・ゲール文化の遺産をめぐる研究も盛んになってまいりました。そこで 2016 年度第 2 回研究会では、ジェイムズ・マクファーソンを取り上げることに致します。ジェイムズ・マクファーソンが翻訳した『オシアン詩』は、18 世紀のスコットランド啓蒙の牽引者である知識人たちの働きかけによって刊行されました。本発表では、アダム・ファーガソンとヒュー・ブレアといった知識人に焦点を当てながら、彼らの主張する社会発展段階説が『オシアン詩』とどのような関わりをもってくるのか、興味深いご発表をいただけるのではないかと思います。つきましては 2016 年度第 2 回研究会を下記の要領にて開催いたします。ふるってご参加くださいませう、ご案内申し上げます。

日時： 2017 年 1 月 21 日(土) 15:00 ～ 16:30

会場： 拓殖大学 文京キャンパス C 館 302 教室

(東京メトロ・丸ノ内線 茗荷谷駅下車、徒歩 5 分)

発表者：三原 穂氏 (琉球大学)

論題： 社会発展段階説と『オシアン詩』

要旨： ジェイムズ・マクファーソン(1736-96)は、『スコットランドのハイランドで収集された古詩断片』(1760)、『フィンガル』(1762)、『テモラ』(1763)さらに『フィンガル』と『テモラ』の合本版である『オシアンの作品』(1765)と『オシアンの詩』(1773)から構成される翻訳作品群を発表。18 世紀のスコットランド啓蒙の牽引者である知識人ヒュー・ブレア(1718-1800)とアダム・ファーガソン(1723-1816)は、マクファーソンによる翻訳が刊行されるきっかけをつくり、この翻訳群を世に出すことに貢献した。『オシアンの作品』の第 2 巻の巻末に収録された「フィンガルの子オシアンの詩に関する批評的論文」でブレアは、人間の社会が大きな 4 つの段階を経ながら発展していくという社会発展段階説を示している。ファーガソンもこの発展段階説を唱えた。本発表では、ブレアとファーガソンが主張した社会発展段階説に焦点をあてつつ、当時、書き言葉を文明の象徴とする考えに対して懐疑がみられたという事実も考慮に入れながら、マクファーソンの翻訳がこれら段階説や懐疑的傾向と関わり合いをもっていたことを明らかにしたい。

三原 穂氏 専門分野：18 世紀英文学、ジェイムズ・マクファーソン

著書：『学術研究と文学創作の分化—18 世紀後半イギリスの古詩編集』

(単著、音羽書房鶴見書店、2015 年)

なお、研究会終了後、大学近くで懇親会を開催する予定です。